『マウス』は何を語るのか

現代アメリカ文化におけるホロコースト とユダヤ的アイデンティティー

麻　生　享　志

ホロコーストという歴史的に最も微妙で扱いにくい話題のひとつをコミックとして著し、世界的な反響を受けたアート・スピーゲルマン（Art Spiegelman）。作品『マウス［*Maus Ⅰ, Ⅱ*］』（1986, 91）は、全米だけでも 40万部を売り、日本語も含め実に 16カ国語に翻訳された（cf. Jacobowitz 49）。その『マウス』が『ニューヨーク・タイムス・ブック・レヴュー［*New York Times Review*］』誌のベストセラーリストに「フィクション」として顔を出したとき、スピーゲルマンは編集者宛の手紙で「『フィクション』という項目が事実にもとづかない作品を意味する以上、不愉快に感じずにはいられません」と述べ、『レヴュー』誌の扱いに不快感を表した。

> デヴィッド・デューク（David Duke）［のような人種主義者］が ―仮に本を読むとして ―ヒトラー時代のヨーロッパと強制収容所での父の体験とその記憶を頼りに、綿密な調査のもとに書かれた作品が「フィクション」と分類されているのを見たらどのように反応するのか、考えるだけでもぞっとします。（“The Problem of Taxonomy” 4）

白人保守主義の旗印の下、1990年の中間選挙でルイジアナ州の白人票を半数以上獲得したデュークを引き合いに出す作者からの抗議に慌てたのか、『レヴュー』誌は『マウス』を「フィクション」欄から「ノン・フィクション」欄へと移し、その場を収拾する。[1] しかし、スピーゲルマンの抗議が単なるジャンル論でなかったことは、その後のエミー・ハンガーフォード（Amy Hunger-

ford）の指摘からも明らかである。

> ［スピーゲルマンの］コミックを「フィクション」として分類できないのは、そうすることによってホロコーストを「フィクション」であると見なしてしまうからであり、そうする者はデヴィッド・デュークのような人種差別主義者に自らをおとしめてしまうことになるからである。つまり、『レヴュー』誌は［中略］判断能力に欠けているというよりも、むしろ不道徳であるということになる。（Hungerford 124）

『レヴュー』誌が犯しかけた過ちとは、ジャンル論ならぬ道徳論、それも反ユダヤ主義のレッテルを貼られかねないものだったのである。

この一件について『レヴュー』誌の判断がどこまで意識的なものであったのかは定かでないが、ホロコーストに対するアメリカの歴史認識のある側面を浮き彫りにしたことは間違いない。つまり、国内に居住する多くのユダヤ系住民の存在にもかかわらず、またブッヘンワルト（Buchenwald）やダッハウ（Dachau）の強制収容所からユダヤ人収容者を直接救い出したのがアメリカ軍であったという歴史的事実にもかかわらず、ホロコーストという陰惨な出来事がアメリカでは充分に認知されていないということである。[2] 事実、戦時中からホロコーストへの抗議行動がユダヤ系移民を中心に展開されてきたにもかかわらず、[3] 戦後最初のガラップ世論調査では、ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺について、12%以上の回答者がそのような事実はなかったと答え、さらにもう12%の回答者が意見を保留した。また、犠牲者数に関する問いにも、ホロコーストの事実を認めた回答者ですらがその実体をかなり低く見積もっていることが明らかになった。すなわち、犠牲者数が 10万人に満たないと答えた回答者が 27%に達する一方、600万人以上と答えた回答者はわずか 4 %にすぎなかった（cf. Dollinger 107, 253 n. 2）。さらに1964年、およそ20年前に提案されたものの実現されないままになっていたリヴァーサイド公園ホロコースト記念碑建立計画の設計図を、ワルシャワ暴動の生存者グループが自発的に市の芸術委員会に提出した際には、計画された「記念碑」が大きすぎること、この

ような記念碑の建設が他の社会・民族的少数派を刺激するであろうこと、そしてなによりも「公園の記念碑はアメリカの歴史に関係あるものに限られる」（Farrell 9）との理由から承認されずに終わる。多くのユダヤ系国民を抱えながら、ホロコーストのもつ歴史的意味がアメリカ社会において真剣に取り扱われなかった典型的な一例といえる。

その一方で、スピーゲルマンの『マウス』執筆をはじめ、アメリカ・ホロコースト記念博物館（The United States Holocaust Memorial Museum）の設立、スティーヴン・スピルバーグ（Steven Spielberg）による『シンドラーズ・リスト［*Schindler's List*］』（1993）の映画化などに見られるように、ホロコーストの記憶を保存しようという動きが、ここ20年来活発化している。これは 1960年代以降の世界情勢の中で、ホロコーストがその歴史的事象を離れ特別な意味をもち始めたことと大きな関連をもつ。ソフィア・レーマン（Sophia Lehmann）は、1960年代から1970年代初頭にかけてユダヤ系アメリカ人作家の間でこれまでにない関心がホロコーストに集まるようになった事実を取り上げ、アイヒマン裁判以降、とりわけ 1967年の第三次中東戦争を経て、「ユダヤ人の多くを破滅に追いやった悲劇が再度繰り返されるのではないかという不安」がホロコースト文学の隆盛につながったと指摘している（Lehmann 31）。

また、近年急激にその数を増やし始めたホロコーストに関する様々な表象の背景には、実際にこの歴史的悲劇を体験した世代が次第にこの世を去り、代わってその直接の記憶を持たない第二世代が増えてきた状況が深く関連している。ポスト構造主義思想のなかでホロコースト表象のあり方を支配的に定義づけてきたアドルノのテーゼ —「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」（アドルノ 36）—にもかかわず、1980年代以降問題の中心は、「表現するか否か」という倫理的次元から「いかに表現するか」という実践的な次元に移ってきた（Huyssen 28）。これもホロコーストを直接体験した世代からそうではない世代へとユダヤ系文化の中心が移ってきた証拠であり、マリアンヌ・ハーシュ（Marianne Hirsch）のいう「ポスト・メモリー（*postmemory*）」、すなわ

ち「［ユダヤ人大量虐殺を体験した］第一世代のトラウマへの第二世代の反応」が、ホロコーストをめぐる表象表現の主流となりつつある現実を映し出してのことである（Hirsch “Surviving Images” 218）。

以下ではこうした状況のなかで書かれたスピーゲルマンの『マウス』を中心に、1990年代以降のアメリカ文化のなかで、ホロコーストがどのような意味をもち、どのような変化をユダヤ系アメリカ人、とりわけホロコーストを体験していない第二世代に与えているのかを検討する。特に注目したいのは、様々な形でホロコーストの表象がアメリカ文化に浸透する中で、この歴史的事象が実はさほどよく理解されていないばかりか、ユダヤ系アメリカ人の民族的アイデンティティーの希薄化とそれに対する保守的な反動を引き起こしているのではないかという点である。本論では、社会によって慣習化された人種・民族的なアイデンティティーと、文化的コンテキストのなかで書き換え可能な人種・民族意識が複雑に絡み合う状況の中で、人種と文化のあるべき姿を模索し、検討する。

１．希薄化するユダヤ的アイデンティティー：「ホロコーストのアメリカ化」と『マウス』におけるユダヤ的アイデンティティーの再表

1979年４月24日、アメリカ大統領ジミー・カーター（Jimmy Carter）が高らかに呼びかけて以来、幾多の困難を乗り越え 1993年５月の開館に至ったアメリカ・ホロコースト記念博物館。その設立のきっかけはサウジ・アラビアへ最新鋭F-15型戦闘機の売却を決めたカーター政権が、国内のユダヤ系住民の反感を最小限に抑えようとした曰くつきのものではあったが、開館までの十余年間に二億ドルに達する寄付を集め、開館後の一年では予想を上回る二百万人の入場者を集めるという大成功を収める。なかでも関係者を喜ばせたのが、初年度入場者のうち非ユダヤ系入場者数が60%以上を占めていたことである。アメリカという多民族国家においてホロコースト記念館を設立するにあたり、設立委員会は当初からナチス・ドイツに迫害を受け、惨殺されたユダヤ人のみなら

ず、あらゆる人種・民族の生命と人権を守ることを目的とする博物館建設を念頭においていた。この計画を担当し、指揮にあたったマイケル・ベレンバウム（Michael Berenbaum）はこれを「ホロコーストのアメリカ化」と呼び、次のように説明する。

［ホロコーストについて］ニューヨークやサンフランシスコに住む生存者家族だけに訴えるのではなく、アトランタの黒人指導者や中西部の農家、北東部の産業経営者にも訴えるような展示でなければなりません。ホロコースト記念博物館は、ワシントンを訪れる多くのアメリカ人をヨーロッパの過去に連れ戻し、その現実を伝えるのです。ホロコーストのアメリカ化は、その歴史的出来事が正確に伝えられる限り、名誉ある営みなのです。（Berenbaum 20）

ベレンバウムの戦略は、博物館の設計にあたったジェームス・インゴ・フリード（James Ingo Freed）により忠実に守られる。フリードはできるだけ多くの人々がホロコーストの記憶を共有することができるよう、博物館の入り口に入場者の姿・形を映し出す巨大なガラス・パネルからなる「民族の壁［The Walls of Nations］」を造る。この壁に映し出される自己の像に、入場者の一人一人はこれから目撃する出来事が、あたかも自らの身に起きる事柄であるかのような錯覚を抱く。さらにジェームス・ヤング（James E. Young）によれば、開館当初には館内に設置された三カ所のチェック・ポイントで更新できる身分証の発行というアトラクションもあったという。これにより入場者は、博物館の提供する仮想的なホロコースト体験をより現実的なものとして享受できたのである（cf. Young “America’s Holocaust” 76-7）。戦時中ユダヤ人がホロコーストを逃れるために偽の身分証を求めていたことを思いおこせば、それとは全く正反対のことがアメリカ・ホロコースト記念博物館で行われていたことになる。この点についてジョナサン・ローセン（Jonathan Rosen）は、「あたかも誰もがアメリカ人として入館し、ユダヤ人として博物館を後にすることを期待されているかのようである」と述べている（Rosen 11）。「ホロコーストのアメリカ化」

は、ともするとホロコーストの「キッチュ化」を招く危険性をもっていたのである。

その一方で、首都ワシントン DC の一角にアメリカ・ホロコースト記念博物館が建立されたことは、ユダヤ系移民とその子孫にとって、アメリカ社会への同化がまさに成就されたことを象徴的に物語る。19世紀以降の移民ラッシュの中、アメリカ社会への同化を求め続々とヨーロッパから新大陸へと渡ってきたユダヤ系移民も、移民規制が強化された20世紀初頭には他の移民グループ同様に排斥の対象となった。特に1920年代には、自動車王ヘンリー・フォード（Henry Ford）がアメリカ社会に偏在するユダヤ系移民に大規模な反対運動を起こし、ハーバード大学学長アボット・ローレンス・ローウェル（Abbott Lawrence Lowell）は、急激に増加するユダヤ系二世学生に対する入学者数割り当ての必要性を唱えた。アメリカにおける「『ユダヤ人問題』」の深刻さを印象づけた出来事である（Takaki 305）。

このような被差別的状況に置かれてきたアメリカのユダヤ系住民にとって、一つの大きな転機となったのが第二次世界大戦であり、とりわけホロコーストというこの戦争を象徴する陰惨な出来事であった。戦後ユダヤ系アメリカ人は、世界に散在するユダヤ民族の生命および人権保護を念頭に、国際連合の発足、ならびにパレスチナにおけるユダヤ人国家の建設を積極的に訴え、その両者を勝ち取る（cf. Dollinger 107-8）。但し、こうした時期にもアメリカのユダヤ系住民にとって、民族・宗教的アイデンティティーの保持より社会への同化が優先課題であったことに変わりはなく、1960年代にはアンディー・ウォーホール（Andy Warhol）が作品「手術前・手術後［“Before and After”］」（1960, 1962）で皮肉った「ノーズ・ジョブ」が流行。自らの民族的出自を隠そうとするユダヤ系アメリカ人の間で、ユダヤ人固有の鷲鼻をアングロ・サクソン風の上向きの鼻へ整形する手術が流行した。その後も、同化に特に積極的といわれるアメリカ・ユダヤ系宗派最大派閥の改革派が、同性愛や避妊といった現代的なセクシュアリティーの問題を容認するなど、アメリカ的価値観の受け入れを

積極的に行ってきた。アメリカ・ホロコースト記念博物館の開館と成功も、こうした一連の同化政策と並行するものであり、ゆえに―皮肉ではあるが―アメリカ社会におけるユダヤ性の希薄化の象徴でもある。そして『マウス』を通じ、ユダヤ的アイデンティティーの希薄化に対する懸念とホロコースト第二世代として戦後アメリカ社会の中で自らが置かれてきた状況をあらわしたのがアート・スピーゲルマンなのである。

ポーランド出身のユダヤ人の両親をもつスピーゲルマンは、第二次世界大戦後間もない1948年スウェーデンのストックホルムで生まれる。その後、家族とともにアメリカへ移住し、ニューヨーク郊外のクィーンズ地区レゴ・パークに落ち着く。1960年代、コマーシャル・アーティストとして働き始めたスピーゲルマンは、同時にコミック制作にも興味をもち、後に妻フランソワーズと共同編集することになるコミック誌『ロー［*Raw*］』を創刊する。1992年にピューリッツァー賞を受賞した『マウス』は、Ⅰ巻（1986）とⅡ巻（1991）から成り、『ロー』誌に1980年から掲載されたほか、『マウス』には収録されていない「最初」の「マウス」がコミック誌『ファニー・アニマル［*Funny Animal*］』に1972年に掲載されている。このように『マウス』は、1970年代から1990年代初頭というホロコーストの表象を巡り様々な論議が交わされていた時期に執筆された。そして、スピーゲルマン自身「最良の形式」のもとに書かれたと自負するだけのことはあり（Goffard）、商業的成功は勿論のこと、世界を騒然とさせたクロード・ランズマン（Claude Lanzmann）の『ショアー［*Shoah*］』（1985）同様の高い評価を各方面から受ける。なかでもこの作品に惜しみない賛辞を送ったのがいわゆるポスト構造主義系の批評家で、『ニューヨーク・タイムス・ブック・レヴュー』誌では『ホロコーストの証言［*Holocaust Testimonies*］』（1991）を著したローレンス・ランガー（Lawrence L. Langer）が、『マウスⅡ』を「ホロコーストの寓話」と呼び、「極めてまじめな絵画文学」であると絶賛（Langer 1）。『ネーション［*Nation*］』誌、『ニューヨーカー［*New Yoker*］』誌といった一流の文芸誌も好意的な書評を寄せたのに加え、『アメリカ歴史研究

［*Journal of American History*］』誌のような学術誌までもがスピーゲルマンの作品を取り上げた（cf. Brown, Mordden, Stone）。

こうした『マウス』成功の秘訣について、ドミニク・ラカプラ（Dominick LaCapra）は『アウシュヴィッツ以降の歴史と記憶［*History and Memory after Auschwitz*］』（1998）の中で、積極的理由のみならず消極的理由も作用したと分析する。その一つは現在私たちが置かれている文化・芸術的状況のなかで、ショッキングな出来事やスキャンダラスな事象が受け入れられやすい傾向にあることと関係する。この傾向は特にポストモダニズム的な価値観、すなわち「大衆文化とエリート文化の境界」を脱構築することによって、ある種の驚きを受け手に与える作品を高く評価する批評的価値観と強く結びつく（LaCapra 141）。ホロコーストという歴史的にも哲学的にも高尚な話題をコミックという大衆文化的な媒体を用いて表現した『マウス』は、ポストモダニズムを中心とする近年の批評の枠組みの中ですんなりと受け入れられたというわけである。また、ラカプラが挙げるもう一つの理由に、ホロコーストという出来事が、一般にはいまだによく理解されてないという点がある。すなわちスピーゲルマンが「ホロ・キッチュ［Holokitsch］」と呼ぶ様々なホロコースト表象ならびに報道は、極めて表層的なものにすぎず、かえって人々の無理解を助長する（cf. LaCapra 141）。一見したところわかりやすい表現形式を持つ『マウス』には、表層的な知識しか持たない大衆読者にも広く受け入れられる素地があったというわけである。

こうして批評的にも商業的にも成功を収めた『マウス』であるが、この作品の最大の特徴であり、なおかつ最大の問題点といえるのが動物頭を用いた登場人物の戯画化である。具体的にはユダヤ人にはネズミの頭を、ドイツ人にはネズミの天敵であるネコの頭を、ポーランド人にはブタの頭、フランス人にはカエルの頭、アメリカ人にはイヌの頭を用いて描く民族・国民表象におけるアレゴリー化の手法である。しかし、ともすればステレオタイプの再強化につながりかねないこの手法も、どういうわけか多くの批評家に好意的に受け止められ

ている。例えばジェームス・ヤングは、「ユダヤ人を寓意的にネズミとして描くことで、スピーゲルマンはユダヤ人を害虫とみなしていたナチス的なイメージを戯画化し、その意味を切り崩すことに成功している」と指摘する（Young “The Holocaust” 690）。また、ジョセフ・ウィテク（Joseph Witek）は、スピーゲルマンが人間を動物にたとえるのは、「テキストに寓意的な意味を付与しようするからではなく、［戦争における］略奪、虐殺、そして残忍さを［より一般的なイメージとして喚起］しようとしているからだ」と述べる（Witek 114）。そして当のスピーゲルマン本人は、あるインタヴューで動物頭を用いた理由とその効果を次のように説明する。

> 私自身には［ホロコーストの］経験はありません。だから実際に起きた事柄を表現している振りをすれば、［読者を］騙すことになります。私には小さな町で罪を犯したドイツ人がどのような顔つきをしていたのか、正確にはわかりません。私の考えは、残された写真や映画から生まれたものです。何を描くにも、私のすることには正当性が欠けているのです。もし私が［動物頭でなく］人間の頭を使って表現すれば、［『マウス』］は非常に感傷的な［作品］になっていたでしょう。おそらく同情を求める陳腐な訴え―例えば「失われた600万のユダヤ人を思いおこせ」といった訴え―になっていたと思いますが、それは私の目指していたものではありません。ネコやネズミといった一種の暗号を用いることで、読者が暗号解読の末、その裏に存在する現実の人々に辿り着くことが可能になるのです。だから［動物頭を使うこと］は、より直接的に対象を扱うことになるのです。（Groth and Fiore 190-1）

こうしたスピーゲルマンの主張は、ホロコースト第二世代の作家として一見誠実に聞こえるが、いささかこじつけがましくもある。特に寓意的な戯画化こそ「より直接的に対象を扱うことになる」という弁明には、首を傾げたくなる読者も少なくないであろう。実際、『マウス』の戯画化による効果の中には、ホロコーストという多くの読者にとって接しにくい話題をより身近にさせたという点がある。もしもスピーゲルマンが本当にブレヒトばりの疎遠化のみを目

的としていたのなら、他の表現手段と方法があったはずである。ネズミがユダヤ人を寓意するだけでなく、アメリカ的文脈の中でも親和化作用を持つことをスピーゲルマン自身が意識していたことは、ミッキー・マウスへの言及を含む『マウスⅡ』冒頭のエピグラフから明らかである。

「ミッキー・マウスは、かつてなく惨めな理想像である。［中略］健やかなる人間精神ならば、動物世界にはびこる最も汚く不潔な害虫が理想的動物にはなり得ないことを若者たちに教えるであろう。［中略］ユダヤ人を追放し、我が国民を野蛮化の危険から救え！ミッキー・マウスを追放せよ！ナチスの腕章をつけよ！」—1930年代半ばドイツ・ポメラニア発行の新聞記事より（*Maus Ⅱ* 3）

さらに、テレビでお馴染みのカートゥーン『トムとジェリー［*Tom and Jerry*］』との連想から、ネコに敵対するネズミという『マウス』の設定は、第二次世界大戦中のアメリカとナチス・ドイツの関係をも示唆する。こうした点を考慮に入れる限り、次に挙げるジュディス・ゴールドスタイン（Judith L. Goldstein）の批判は、適切なものといえる。『マウス』における人間の戯画化を芸術的成功と認めた上で、ゴールドスタインはこう指摘する。

こうした表象表現は、私たちの社会（モダンであろうとポストモダンであろうと、初期資本主義社会であろうと後期資本主義社会であろうと）では、ある固有の事象を表現するにあたり、他人の共感を誘うためには、それを実際とは異なる文化的価値を持つものに置き換えて表現しなければならないということを示している。（Goldstein 87）

スピーゲルマンだけでなく社会全般にも向けられたゴールドスタインの批判は、『マウス』の戯画化が「ホロコーストのアメリカ化」を助長しうることを示唆している。

「ネズミ」が「わかりやすい」メタファーとしてユダヤ人とアメリカ人を結びつける役割を果たしている一方で、両者の間にはっきりとした境界線が引かれていることもまた事実である。『マウス』においてアメリカは「イヌ」の国と

して描かれ、その国で暮らすユダヤ人移民親子ヴラデクとアーティーのネズミ姿は、他者としてはっきりと識別されている。さらにアーティーの妻フランソワーズは、フランス人でありながらアーティーと婚姻関係にある改宗者としてネズミ姿で描かれる。スピーゲルマンは、『マウス』における動物のイメージについて「ドイツ人から借りてきた」ものであり、人間を「国籍、人種、あるいは宗教の違いによって分けるのは馬鹿げたことである」とあるインタビューで述べているが、同時に社会における偏見的イメージがそう簡単には一掃されないことも認めている：「これらの動物のメタファーは、作品中自己破壊するように描かれているし、事実自己破壊していると思うけれど、それでも幾ばくかの意味はまだ残っている。それはメタファーとして働き、人々はそれに固執する」(Bolhafner 98)。

スピーゲルマンはこの微妙な人種、宗教、国民性の残像を表現するために、『マウスⅡ』第二章「アウシュヴィッツ：時は過ぎ去り」の冒頭では―ネズミ頭ではなく―ネズミの仮面をかぶったアーティを登場させる。『マウス』執筆のプロセスをポストモダニズム風に入れ子構造の中に描くこの場面で、母の自殺、父の死、自身の結婚と第一子の誕生、『マウス』の商業的成功など矢継ぎ早に過ぎ去る現実から神経をすり減らしたアーティーは、ついに精神科医パヴェルに治療を求めることになる。そしてパヴェルとの診療で、幼児退行のごとく小さな身体に戻ったアーティーは、ホロコーストを経験していない自分が父に代わり語ることの正当性に自ら疑念を示す。ホロコースト生存者の一人でもあるパヴェルは、「死んだ犠牲者が自ら話して聞かせることはできないのだから、もうこれ以上書かないほうがいいのかもしれない」と助言する。これに対しアーティーは、サミュエル・ベケットの言葉を思いおこす。「そう、サミュエル・ベケットはこんなことを言っていたっけ。『言葉はどれも沈黙と虚無の上にこびりついた不必要なシミのようなものである』と」。そして一コマの沈黙の後、アーティーは「とはいっても、ベケット自身は確かにそう<u>言葉にしたんだ</u>」と加え、あえて語り続けることの必要性を訴える（*Maus Ⅱ* 45)。

動物頭から仮面頭への移行は、アレゴリーからシンボルへと表象のレベルが移ったことを示唆する。そして、アーティーや他の登場人物の仮面姿は、メディアとの接触はもちろん、精神科医との面談等のコミュニケーション行為を媒介に形成される個人のアイデンティティーのもつ恣意的な側面を浮き彫りにする。その一方で、もしもホロコーストをはじめとする過去のシーケンスとヴラデクの語りの連続性がヴラデクのネズミ頭により保証され、さらに父の語りに立ち会うアーティーもまた同様の動物頭をつけることで世代間の連続性を保証しているのだとしたら、明らかに「アウシュヴィッツ：時は過ぎ去り」の冒頭の場面で描かれる仮面をつけたアーティーは、作品中の他の場面で現れるアーティーとは不連続な存在である。代わってこの仮面のアーティーと存在の連続性をもつのは、『マウス』カバーの作家紹介欄に描かれるスピーゲルマン本人である。窓の外の櫓で銃を構え警備にあたるナチス兵士を背景に、壁には『マウスⅠ』の表紙カバーと『ロー』誌のポスターが貼ってある室内で、タバコを片手に仕事机に向かうスピーゲルマンは、『マウス Ⅱ』第二章冒頭のアーティー同様、ネズミの仮面の下に描かれる。仮面姿のアーティーのアイデンティティーと自己のアイデンティティーを重ね合わせることで―すなわち作品世界と現実世界を重ね合わせることで―スピーゲルマンは現代アメリカ社会におけるユダヤ性のあり方がもつ恣意性を訴えると同時に、これを再定義しようと試みているのである。

論文「ユダヤ性について［“On Being Jewish”］」（1993）において、マイケル・クラウス（Michael Krausz）はホロコーストこそ現代を生きる「ユダヤ人の歴史のなかで、必須の要素」であり、「ホロコーストの語り」と無関係にはユダヤ的アイデンティティーを構築することはもはや不可能であると主張する（Krausz 272）。「歴史の共有」という非本質的な特徴を前提とするクラウスによるユダヤ的アイデンティティーの再定義は、民族的特徴はもちろん宗教的特徴すらが必ずしもユダヤ性を形づくるとはいえない今日のユダヤ的状況を反映している。さらにこれをもう一歩進めれば、ホロコースト生存者の減少にと

もない、ホロコースト体験の「歴史」ならぬ「記憶」を共有することだけが、かろうじて現代を生きるユダヤ人に残されたアイデンティティーの証明ということになる。この意味で、スピーゲルマンの描く仮面をつけたアーティーの姿は、動物頭の父ヴラデクとの非連続性を示しながら、現代のユダヤ系アメリカ人が置かれた文化相対主義的環境の中で、いかにユダヤ的アイデンティティーを再定義すべきかという問題を提起する。戦時中ポーランド人を装いながら逃走するアーティーの母アニャが、ユダヤ的出自をユダヤ人ならではの身体的特徴ゆえに隠しきれなかったのとは対象的に（*Maus I* 136-7）、アーティーのネズミの仮面は、ユダヤ性がもはや血縁や身体性に結びついた本質的特徴ではなく、それを選択する個人の意志に任された文化的特徴の問題、別の言葉でいえばアイデンティティ・ポリティクスの問題であることを明示する。マイケル・ロスバーグ（Michael Rothberg）が正しく指摘するように、『マウス』はまさに「新しいユダヤ系アメリカ人の自己形成」のプロセスを表象する作品なのである（Rothberg 665）。

その一方で、スピーゲルマンの「『人種』、民族性、国家的帰属性」の取り扱いは「多くの矛盾を含み、首尾一貫していない」とし、『マウス』はむしろ作家の「美学的方法論」を強く反映する作品であると主張するハーシュのような批評家がいることも事実である（Hirsch “Family Pictures” 13）。確かに母の自殺のショックが執筆の根底にある『マウスⅠ』と、より広範な社会・歴史的視野から書かれた『マウスⅡ』とでは、ユダヤ的アイデンティティーの取り扱いは異なり、こうした批評の論的根拠となりえる。しかし、Ⅰ巻、Ⅱ巻を通じてのスピーゲルマンの人種や国籍を巡るアイデンティティーの扱いは、つねに理想主義的な解決を目指している点では一致しており、それが作品の中心的テーマとなっていることは否定しがたい。

もちろん、スピーゲルマンが提案する「仮面」のアイデンティティー・ポリティクスが、すべてに有効な解決策というわけではない。この手法は国民性、民族性、あるいは宗教性にもとづく社会的偏見を脱構築的に分析する際には効

果的だが、人種的アイデンティティーの問題を取り扱うにはいまだ不十分である。つまり、読者は仮面の下の表情を読みとることができないがゆえに、仮面に映し出される社会的意味や偏見の恣意性を充分に意識することはできるが、仮面の下に隠された人種性、つまり肌の色はいまだ識別可能であり、従ってそれにもとづく固定的な意味、すなわち人種的偏見を再生産し続ける危険性をもつ。例えば、多くの批評家に引用される『マウスⅡ』における父ヴラデクのアフリカ系アメリカ人への差別的な感情を批判的に描いたシーンですら、人種問題に対する積極的な解決策が何ら提案されているわけではない。むしろアフリカ系アメリカ人ヒッチハイカーとの希薄な人間関係が、この作品におけるユダヤ系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人との唯一の接点であることこそ、スピーゲルマンの人種問題に対する甘さを表している。[4] 冒頭で紹介したように『レヴュー』誌が『マウス』をフィクションと見なしたことに猛然と抗議し、ホロコーストを巡る人種問題を提起したスピーゲルマンではあったが、彼自身の理想的ながらとても現実的とはいえない人種感覚は、1993年２月に『ニューヨーカー［*New Yorker*］』誌に掲載された表紙イラストに不用意にあらわれる。スピーゲルマンが「ニューヨーク市民へのヴァレンタイン・カード」として寄せたそのイラストには、ユダヤ教宗派のなかでも急進的なハシディスト派ユダヤ系男性とアフリカ系女性のキス・シーンが描かれていたのである。

２．衝突する民族：クラウン・ハイツと『マウス』

1993年２月13日、『ニューヨーク・タイムス［*New York Times*］』紙は、同月８日に発行された『ニューヨーカー』誌表紙イラストの人種的表現の不適切さを指摘するベットゥ・アン・モスコヴィッツ（Bette Ann Moskowitz）の批判的論評を掲載する。[5]

アート・スピーゲルマン氏は、これが読者への「贈り物」だという。ならば「贈り物」とは一体何なのか。誰がその「贈り物」に喜ぶのか。「贈り主」だけではないのか。スピーゲルマン氏は、同性愛者の友人に異性愛者の恋人を

紹介しようというのか。ローマ教皇の名前で中絶医に寄付をしようというのか。糖尿病患者にチョコレートを与えようというのか。(Moskowitz 21)

いささか筆の勢いがあまり気味のモスコヴィッツではあるが、当時のアフリカ系アメリカ人とユダヤ系アメリカ人の置かれていた人種的状況を考慮にいれれば、「ほんの一瞬だけでも、目を閉じて、現代生活の悲劇的な複雑さを越えて、本当に『愛こそが必要なのだ』と想像してみてはどうでしょう」というメッセージとともに掲載されたスピーゲルマンのイラストが、いかに見当違いであったかを理解することができよう（“Editor's Note” 6）。当時、ブルックリン、クラウン・ハイツ地区では、1991年８月19日に起きたハシディスト派ユダヤ人とアフリカ系アメリカ人との暴動を背景に、人種・宗教的緊張がこれまでになく高まっていた。事の発端は、ハシディスト派ユダヤ人ヨセフ・リフシュ（Yosef Rifsh）の運転する車が信号無視の末、路肩に乗り上げ、七歳のアフリカ系アメリカ人少年ガヴィン・ケイトー（Gavin Cato）を轢き殺し、一緒にいた彼の従姉妹アンジェラ（Angela）にも重傷を負わせてしまったことにある。この事故をきっかけに、オーストラリアからの留学生でハシディスト派の神学生ヤンケル・ローゼンバウム（Yankel Rosenbaum）が二人のアフリカ系アメリカ人レムリック・ネルソン（Lemrick Nelson）とチャールズ・プライス（Charles Price）を中心とする暴徒に刺され、死亡するという事件が起き、両民族グループの関係は非常に険悪なものになっていた。クラウン・ハイツを巡る人種的状況は、スピーゲルマンが考える理想的関係とはほど遠いものであった。

このように、ユダヤ系アメリカ人の置かれた人種状況を考える上で、決して無視できないのがアフリカ系アメリカ人との関係である。1960年代、いわゆるブラック・パワーの台頭で、アフリカ系アメリカ人がはっきりと反ユダヤ的な態度を露わにするまで、[6]「ユダヤ人と黒人はアメリカにおいて過去を共有し、共通のアメリカ的未来に向けて前進することができるという神話」が—とりわけユダヤ系アメリカ人の間で—信じられていた（Dollinger 194）。事実、公民権運動を支えた白人学生たちの多くはユダヤ系アメリカ人であり、「アメリカ・

ユダヤ会議［American Jewish Congress］」のネーザン・エデルスタイン（Nathan Edelstein）は「共通の目標に向け対等な関係」の下、ユダヤ系とアフリカ系アメリカ人が手を結ぶべきと主張した（qtd. in Dollinger 195）。このようなユダヤ系の理想が実を結ばなかった背景には、アフリカ系アメリカ人がユダヤ系アメリカ人の態度を「父権的」と捉えたことと、ユダヤ系内部にも強硬なシオニストがいたことなどが挙げられる。が、加えて大きな問題となったのは、1967年の第三次中東戦争におけるイスラエル軍のガザ侵攻である。ブラック・パワー運動の中心的存在で、かねてから中東紛争におけるパレスチナ支持を表明していた「学生非暴力調整委員会［Student Non-Violent Coordinating Committee］」のストークリー・カーマイケル（Stokely Carmichael）が「ユダヤ系との連合関係を清算し、ブラック・パワー中心のグループの中で確固たる地位を築くよう専念する」と述べるなど、この戦争がユダヤ系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の関係に及ぼした影響はきわめて大きい（qtd. in Dollinger 201）。そして、人種の壁を超えた共闘が無理とわかると、ユダヤ系アメリカ人もまた、アフリカ系アメリカ人同様に民族主義的な価値観に傾倒していく。1960年代後半から1970年代にかけマイノリティー保護の色合いの強いアファーマティヴ・アクションが教育・雇用の両面においてアメリカ社会に影響を及ぼし始めると、これを「逆差別」と見なしたグループのなかにはユダヤ系保守派がいた。また、最も進歩的といわれる「アメリカ・ユダヤ会議」もアファーマティヴ・アクションが求める数的割り当てに懸念を表明した。[7] さらにここ十数年にわたり高まりつつあるユダヤ的アイデンティティーの再定義と再強化は、穏健な改革派をもってして律法への回帰を訴えるもので（cf. Dollinger 217）、アフリカ系アメリカ人の間で広まる反ユダヤ人感情やいまだにアメリカ社会に深く根を下ろす反ユダヤ主義とも相まって、ユダヤ系アメリカ人を取り巻く人種環境を悪化させている。

こうした時代背景のもと、クラウン・ハイツ暴動を題材に戯曲『鏡の中の火［*Fires in the Mirror*］』（1993）を著したアフリカ系アメリカ人パフォーマー、ア

ンナ・ディーヴァ・スミス（Anna Deavere Smith）は、アメリカへやってくる移民は誰もがアメリカ人になるがために自らのアイデンティティーを書き換えなければならないと述べ、複雑な移民構成から成るクラウン・ハイツでは、アメリカ的アイデンティティーの再形成が極度の緊張を各民族グループに与えていると指摘する。そして、悲惨な民族的衝突ではなく、新しいアメリカ的アイデンティティーの創出を求めるスミスは、「この緊張を、列車が乗客をのせ、異なる目的地に連れて行くように、流動的なアイデンティティーの形成へと導いていくことはできないだろうか」と問いかける（Smith xxxiv）。また、1991年のクラウン・ハイツ暴動を「［現在アメリカで］深刻化している黒人による反ユダヤ主義の深刻な一例」と見なし、自己の属する民族グループをも戒める見解を発するアフリカ系アメリカ人研究者コーネル・ウェスト（Cornel West）は、『レース・マターズ［*Race Matters*］』（1993）のなかで、アフリカ系アメリカ人とユダヤ系アメリカ人の関係を次のように分析する。

> 現在見られる黒人とユダヤ人の人種関係の行き詰まりは、黒人とユダヤ人双方のコミュニティーの内部、および両者を横断する形で、それぞれの民族集団の利益だけでなく、黒人であること、もしくはユダヤ人であることがどのような倫理的意味をもつのかを自己批判的に意見交換することによってしか乗り越えていくことができないであろう。（West 75）

スミスもウェストも現代アメリカ社会の多様かつ複雑な人種地図のなかで、各民族グループがそれぞれの抱える問題を乗り越え、他のグループとの間に理想的な関係を築き上げることの重要性と困難さを表しているのである。

一方、『ニューヨーカー』誌イラストの件ではすっかり守勢に回ってしまったスピーゲルマンではあるが、現在アメリカで進行している民族の「バルカン半島化」には強い警戒感を示す。1996年５月の『ロサンジェルス・タイムス［*Los Angeles Times*］』紙で、身体中にホロコーストをイメージするきわめて寓意的な入れ墨をほどこすロシア系ユダヤ移民パンク・フォト・アーティスト、マリナ・ヴァインシュタイン（Marina Vainshtein）へのコメントを求められたス

ピーゲルマンは、これを「アメリカ国内であまりにも進んだ民族的同化」に対する一種の「反動」であると捉え、「かつてはより正義にかなった社会を創ることに注がれていたエネルギーが、いまや民族的権利を主張する競争に注ぎ込まれている」と批判した（Elgrably E1-2）。アイデンティティー・ポリティクスの名のもとに自己のあり方だけを文化的に差異化する行為を問題視するスピーゲルマンの発言は、自己と他者との関係を冷静に見つめ直そうとする点で、スミスやウェストの見解とそう大きな隔たりはないように思われる。

そしてクラウン・ハイツ暴動から７年後の1998年、『カレッジ・イングリッシュ［*College English*］』誌に掲載されたユダヤ系アメリカ人作家アンドレア・フロイド・ローウェンスタイン（Andrea Freud Loewenstein）の論文「人種的ステレオタイプに対峙する：クラウン・ハイツにおける『マウス』［“Confronting Stereotypes: *Maus* in Crown Hights”］」（1998）は、スピーゲルマンが『ニューヨーカー』誌イラストで提案した理想的とはいえ、非現実的な人種関係をより現実的な文脈の中で実践した臨床報告として注目に値する。サウス・ブルックリンのクラウン・ハイツ地区にあるニューヨーク市立大学メドガー・エヴァース校で教鞭をとるローウェンスタインが、暴動から五年後の1996年の春学期に、アフリカ系アメリカ人、およびカリブ系移民を中心とする労働者階級の学生に『マウス』を教材として用いた経験から書いたこの論文では、クラウン・ハイツの複雑な人種関係の中で生きる学生たちが様々な議論を通じ「ユダヤ人に対する偏見を問い直す」だけでなく、「自らを人種差別的ステレオタイプの犠牲者であると同時にその加害者」として再認識し、人種的偏見の「原因」と「影響」について考える機会を得たことが報告されている（Loewenstein 419）。人種・民族の垣根を越えて『マウス』の描くホロコーストの記憶を―キッチュ化することなく―共有する理想的かつ現実的な実践例として、ローウェンスタインの報告はスピーゲルマンの作品がユダヤ的アイデンティティーを再定義するだけではなく、他の人種・民族グループのあり方をも変えていく力をもつことを示したのである。

* 本論の執筆にあたっては2001年度早稲田大学特別課題研究費（課題番号：2001A-802）による助成を受けた。関係各位にあらためて謝意を表す。

注

1　ハーヴェイ・ブルーム（Harvey Blume）とのインタヴュー「リップス［“Art Spiegelman: Lips”］」でスピーゲルマンはこう述べている。「『レヴュー』誌の編集会議で、ある議論がもちあがったそうです。私に伝えられている内容の中でもっともおかしいのは、ある編集者曰く、ならスピーゲルマンの家にいってみようじゃないか。もし巨大なねずみが玄関に現れたら『マウス』をノンフィクションとしよう」（qtd. in Children's Literature Study Web）。

2　実のところ、ユダヤ系アメリカ人ですらがホロコーストに対し一定の距離を保ってきた。ユダヤ系批評家ロバート・オルター（Robert Alter）は1981年『コメンタリー［*Commentary*］』誌上で次のように述べている。「ヨーロッパで我らの同胞に起きたことを決して忘れてはならない。しかし、彼らの現実は、我々の現実ではない」（Alter 54）。

3　アメリカでのホロコーストへの抗議行動は、1942年12月２日、ニューヨーク市にあるユダヤ電信局にて500人余りのユダヤ系職員が、伝えられたナチスの残虐行為に対し10分間仕事を中断して抗議したのが最初。これに呼応して同日夕方、数局のラジオ局がヨーロッパで犠牲となったユダヤ人に二分間の黙祷を捧げた。また、その翌年の３月には、「決して死なない［“We Will Never Die”］」という抗議集会がマディソン・スクエア・ガーデンで開かれている。その後いくつかの抗議集会が開かれるなか、ワルシャワ暴動の犠牲者を追悼する集会が1944年４月19日にニューヨーク市長フィオレロ・ラガーディア（Fiorello LaGuardia）を中心とする有志によって開かれ、市庁舎前に集まったおよそ３万人のユダヤ系住人がこの暴動で亡くなった死者に弔意を表した（Young “America's Holocaust” 69-70）。

4　スピーゲルマン自身、アフリカ系アメリカ人の友人の少なさを告白している（cf. “Getting In Touch with My Inner Racist”）。スピーゲルマンはまた、ユダヤ人女性の表象の問題について無関心であることも指摘されている（cf. Rothberg esp. 674-9）。

5　スピーゲルマンのイラストに不快感を表したのはモスコヴィッツだけではない。1913年の設立以来、反ユダヤ主義と戦い続けてきたユダヤ系団体「反差別同盟［Anti-Defamation League］」もこのイラストに強く抗議した。

6　1964年の調査では、47%のアフリカ系アメリカ人が反ユダヤ感情を持つと答えた。これは同じ質問に対する白人の回答の35%を大きく上回る。さらに1970年の調査で

は実に70％を超えるアフリカ系アメリカ人が「強い反ユダヤ感情」を明らかにしている（Dollinger 195）。

7　最も強くアファーマティヴ・アクションに反対したのは、急進的ともいえるシオニストの集まり「アグダス・イスラエル［Agdath Israel］」で、次のような声明を発表した：「人種差別に何ら個人的には関与していない白人男性が、単に白人男性であるからという理由だけで差別に苦しまなければならない状況を受け入れることはできない」（qtd. in Dollinger 208）。一方「アメリカ・ユダヤ会議」の幹部ナオミ・リーヴァイン（Naomi Levine）は、「アファーマティヴ・アクションという曖昧な考えのもとに始まった政策が、行政により職場におけるマイノリティーの雇用機会の不足を克服する責務とみなされている」と述べ、アファーマティヴ・アクションに対する代案の提示を行っている（qtd. in Dollinger 208）。

Works Cited

Alter, Robert. “Deformations of the Holocaust.” *Commentary* 71.2（1981）: 48-54.

Berenbaum, Michael. *After Tragedy and Triumph : Essays on Modern Jewish Thought and the American Experience*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.

Bolhafner, J. Stephen. “Art for Art’s Sake: Speigeman Speaks on *Raw’s* Past, Present and Future.” *The Comics Journal* 145（Oct. 1991）: 96-99.

Brown, Joshua. “Maus: A Survivor’s Tale, Part 2, And Here My Troubles Began.” *Journal of American History* 79.4（1993）: 1668-70.

Children’s Literature Study Web. “Art Spiegelman（1948-）.” 22 May 2003. ＜http://www.northern.edu/hastingw/maus.html＞

Dollinger, Marc. *Quest for Inclusion: Jews and Liberalism in Modern America*. Princeton: Princeton UP, 2000.

“Editor’s Note” *New Yorker* 15 Feb. 1993: 6.

Elgrably, Jordan. “In Your Faith.” *Los Angeles Times* 13 May 1996: E1-2.

Farrell, William E. “City Rejects Park Memorials to Slain Jews.” *New York Times* 11 Feb. 1965: 1, 9.

Franzbaum, Hilene, ed. *The Americanization of the Holocaust*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1999.

Goffard, Chris. “The Man Behind Maus: Art Spiegelman In His Own Words.” 23 May 2003 ＜http://www/porter.ucsc.edu/fishrap/clasic/story/Maus.html＞.

Goldstein, Judith L. “Realism without a Human Face.” *Spectacles of Realism: Body. Gender, Genre*. Eds. Margaret Cohen and Christopher Prendergast. Minneapolis: U of Minnesota P, 1995. 66-89.

Groth, Gary and Robert Fiore, eds. *The New Comic*. New York: Berkeley Book, 1988.

Hirsch, Marianne. "Family Pictures: *Maus*, Mourning, and Post-Memory." *Discourse* 15. 2 (1992-3): 3-29.

——. "Surviving Images: Holocaust Photographs and the Work of Postmemory." Zelizer 215-46.

Hungerford, Amy. "Surviving Rego Park: Holocaust Theory from Art Spiegelman to Berel Lang." Franzbaum 102-24.

Huyssen Andreas. "Of Mice and Mimesis: Reading Spiegelman with Adorno." Zelizer 28-42.

Jacobowitz, Susan. "' Words and Pictures Together' : An Interview with Art Spiegelman." *Writing On the Edge* 6 (1994): 49-58.

Krausz, Michael. "On Being Jewish." *Jewish Identity*. Ed. David Theo Goldberg and Michael Krausz. Philadelphia: Temple UP, 1993. 264-78.

LaCapra, Dominick. *History and Memory after Aushwitz*. Ithaca: Cornell UP, 1998.

Langer, Lawrence L. "A Fable of the Holocaust." *New York Times Book Review* 3 Nov. 1991: 1, 35-6.

Lehmann, Sphia. " 'And here [Their] Troubles Began' : The Legacy of the Holocaust in the Writing of Cynthia Ozick, Art Spiegelman, and Philip Roth." *Clio* 28. 1 (1998): 29-52.

Loewenstein, Andrea Freud. "Confronting Stereotypes: *Maus* in Crown Heights." *College English* 60. 4 (1998): 396-420.

Mordden, Ethan. "Kat and Maus." *New Yorker* 68.7 (1992): 90-96.

Moskowitz, Bette Ann. "A Valentine Nobody Could Love." *New York Times* 13 Feb. 1993: 21

Rosen, Jonathan. "America's Holocaust." *Forward* 12 Apr. 1991: 1, 11.

Rothberg, Michael. "'We Were Talking Jewish' : Art Spiegelman's *Maus* as 'Holocaust' Production." *Contemporary Literature*. 35. 4 (1994): 661-87.

Spiegelman, Art. "A Problem of Taxonomy." *New York Times Book Review* 29 Dec. 1991: 4.

——. "Drawing Pens and Politics: Mightier Than the sorehead." *Nation* 256. 3 (1994) : 45-6.

——. "Getting in Touch with My Inner Racist." *Mojones.Com.* 23 May 2003.
＜https://bsd.mojones.com/mother-jones/SO97/spiegelman.html＞

——. *Maus Ⅰ : A Survivor's Tale: My Father Bleeds History*. New York: Pantheon, 1986.

——. *Maus Ⅱ : Survivor's Tale: And Here My Troubles Began*. New York: Pantheon, 1991.

Smith, Anna Deavere. *Fires in the Mirror: Crown Heights, Brooklyn and Other Identities*. New York: Random-Anchor, 1993.

Stone, Laurie. "Chasing History." *Nation* 254. 1 (1992). 1: 28-9.

Takaki, Donald. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. Boston: Little, Brown,

1993.

West, Cornel. *Race Matters*. Boston: Beacon, 1993.

Witek, Joseph. *Comic Books as History: The Narrative Art of Jack Jackson, Art Spiegelman, and Harvey Pekar.* Jackson: UP of Mississippi, 1989.

Young, E. James. "America's Holocaust: Memory and the Politics of Identity." Flanzbaum 68-82.

——. "The Holocaust as Vicarious Past: Art Spiegelman's *Maus* and the Afterimages of History." *Critical Inquiry* 24（Spring 1998）: 666-699.

Zelizer, Barbie, ed. *Visual Culture and the Holocaust*. London: Athlone Press, 2001.

テオドール・W・アドルノ『プリズメン』渡辺祐邦・三原弟平訳（東京、筑摩書房 1996）。